

児童・生徒のユーモアが学校適応に及ぼす影響

塚脇 涼太

(比治山大学)

本研究の目的は、児童・生徒の3種類のユーモア（攻撃的ユーモア、自虐的ユーモア、遊戯的ユーモア）が学校適応に及ぼす影響について、学校種（小学校、中学校）と性別を考慮に入れて検討することであった。調査対象者は、小学校4～6年生250名（男125名、女125名）、中学校1～3年生250名（男125名、女125名）であった。分析の結果を総合的にみると、攻撃的ユーモアは学校適応を阻害するが、自虐的ユーモアと遊戯的ユーモアは学校適応を促進する可能性が示唆された。ただし、これらの関連性は学校種と性別によって異なっており、中学生よりも小学生において、また、男子よりも女子において強いことが示された。

キーワード：ユーモア、ユーモアの種類、学校適応

問 題

学校現場において、不登校、いじめ、様々な問題行動など、学校に適応できない児童・生徒の問題が深刻化している。児童・生徒にとって、学校での生活は日常生活の中核をなすものである。よって、学校適応に影響するさまざまな要因を特定していくことは、心理学における重要な研究課題である。

学校適応（school adaptation）について明確な定義をしている研究は非常に少ないが（e.g., 大対・大竹・松見, 2007）、先行研究の多くは、複数の側面から学校における適応を捉えている。なぜなら、学校における児童・生徒の生活は、さまざまな社会的、対人的な問題や課題に接する複雑な社会的文脈であり、そのような状況においては、多面的な適応が求められるためである（中谷・遠山・出口, 2002）。例えば、浜名・松本（1993）は、「学校への関心」、「学習への意欲」、「教師との関係」、「級友との関係」という4つの側面から、小泉（1995）は、「対教師関係」、「学習意欲」、「自校への関心」、「級友関係（正）」、「級友関係（負）」という5つの側面から学校適応を捉えている。また、Perry & Weinstein（1998）は、学校適応を、「学業的機能」、「社会的機能」、「行動的機能」という3つの側面から捉えている。学業的機能とは、学業達成度によって測られる学習に関する技術の獲得と、期待や自己効力感などの学習への動機づけであり、社会的機能とは、仲間からの人気や友達との関係の質、所属感や社会的目標を含む仲間や大人との対人関係のことであり、行動的機能とは、役割行動と注意・感情の自己制御である。これらの研究を鑑みると、学校適応を構成する主要な成分は、対人関係の側面（教師や友人との関係）と学業の側面（学業成績や学習への意欲）であると

いえる。

児童・生徒のユーモアと学校適応との関連性がいくつかの研究によって示唆されている。Damico & Purkey (1978) は、8年生の生徒 3500 名に対してソシオメトリック形式の調査を行うことで、96 名のクラス・クラウン (class clown) を抽出し、無作為に選択された 237 名の非クラス・クラウンとさまざまな性格や行動特性を比較した。クラス・クラウンとは、よくユーモアを使用し、他者を笑わせる子どものことである。その結果、クラス・クラウンは、自己主張が強く、陽気で、リーダーシップがある一方で、学習課題を成し遂げることが少なく、規則に従わないと教師から評価されていた。また、教師や親に対して否定的な態度を持っていることが、自己評定による学校に対する態度尺度の得点から示された。Sherman (1998) は、4年生に調査を実施し、それぞれの児童の社会的距離得点 (どの程度好かれているのかの得点) とユーモア得点 (どの程度面白いと思われるのかの得点) を算出した。社会的距離得点とユーモア得点の関連を分析した結果、両者には正の関連がみられた。また、この傾向は異性間よりも同性間で強かった。この結果は、ユーモアのある児童は、級友から好かれていることを示している。また、社会的距離得点とユーモア得点との因果関係をモデル適合度によって検討した結果、ユーモア得点が社会的距離間を規定するというモデルの適合度のほうが良好であった。つまり、ユーモアによって、級友から好かれるという影響方向が存在していることが示された。ユーモアと学校適応との関連における発達差を検討した研究に、3、7、11年生の児童・生徒を対象とした Fabrizi & Pollio (1987) がある。教室で各学年の児童・生徒を観察したところ、7年生において、ユーモア行動の頻度が高い生徒は、挙手をせずに声を上げ、しばしば席を立つなど、教室内で秩序を乱すことが多く、学習に取り組む時間が少なかった。また、この傾向は 11年生でも同じであったが、授業中の行動はそれほど秩序を乱すものではなかった。以上の研究から、児童・生徒のユーモアと学校適応との関連は、学校適応のどの側面を扱うのかによって異なっていることが示唆される。全体的にみて、児童・生徒のユーモアは級友との関係における適応を促進する一方で、教師との関係や学習における適応を阻害する方向で作用すると考えられる。

しかしながら、児童・生徒のユーモアと学校適応との関連性について検討していくにあたり、ユーモアの種別を考慮に入れる必要があると考えられる。近年のユーモア研究では、ユーモアを類型論的に分類した上で、種々の社会的あるいは心理的健康との関連が検討されており、ユーモアの種別によってこれら諸変数のとの関連性は異なることが示されているためである。たとえば、国外において、Martin, Puhlik-Doris, Larsen, Gray, & Weir (2003) は、ユーモアを、親和的ユーモア (affiliative humor)、自己高揚的ユーモア (self-enhancing humor)、自虐的ユーモア (self-defeating humor)、及び、攻撃的ユーモア (aggressive humor) の 4 種類に分類している。この 4 種類のユーモアを使用した Saroglou & Scariot (2002) は、高校生を対象とした調査を行い、攻撃的ユーモアと自虐的ユーモアの使用傾向のみが、学業に対する動機づけと負の関連があることを示しており、学校適応の学業の側面に及ぼすユーモアの影響は、その種類によって異なることを示唆している。国内では、塚脇・深田・樋口 (2009a) が、ユーモアを、遊戯的ユーモア、自虐的ユーモア、及び、攻撃的ユーモアの 3 種類に分類している。この 3 種類のユーモアを使用した塚脇・深田・樋口 (2011) の調査によって、遊戯的ユーモアと自虐的ユーモアは、ソーシャル・サポートに正の影響を示すが、攻撃的ユー

モアは負の影響を示すことが明らかにされており、学校適応の対人関係の側面に及ぼす影響についても、ユーモアの種類によって異なる可能性がある。

以上を踏まえて、本研究では、ユーモアの種別を考慮しながら、児童・生徒のユーモアと学校適応との関連性を検討することを目的とする。先行研究 (Fabrizi & Pollio, 1987) によって、児童・生徒のユーモアと学校適応との関連性は学齢によって差異が存在する可能性が示唆される。また、大学生を対象とした調査ではあるが、塚脇 (2006) は性別によって、ユーモアと自尊感情や自己受容といった適応指標との関連性は異なることを明らかにしている。そこで本研究では、校種 (小学校、中学校) と性別ごとに分析を行うこととする。

方 法

調査対象者と調査方法

株式会社クロス・マーケティングの保有するアンケートモニター (全国で約 160 万人登録) から、関東地方の 1 都 6 県 (東京都、埼玉県、神奈川県、千葉県、群馬県、茨城県、栃木県) に在住するモニターを、性別 (男、女) と学齢 (小 4、小 5、小 6、中 1、中 2、中 3) によって層化抽出し、調査を依頼した。調査は「教室のユーモアと児童・生徒の適応に関する調査」と題し、web によって親を通じて実施された。有効回答数は 500 名であり、対象者の詳細は、小学校 4 年生 87 名 (男 44 名、女 43 名)、5 年生 77 名 (男 38 名、女 39 名)、6 年生 86 名 (男 43 名、女 43 名)、中学校 1 年生 83 名 (男 42 名、女 41 名)、2 年生 84 名 (男 42 名、女 42 名)、3 年生 83 名 (男 41 名、女 42 名) であった。

測定項目

児童・生徒のユーモアに関する項目 塚脇他 (2009) によるユーモア尺度を参考にして、現職小学校教員 2 名と数回の議論を重ね、小中学生にとって項目内容が適切になるよう修正を加えながら、最終的に 12 項目を作成した (後出の表 1 参照)。教示は、「次の質問は、あなたにどのくらい当てはまりますか？もっとも当てはまると思うところに○をつけてください。」と与え、「全然当てはまらない (1 点)」、「あまり当てはまらない (2 点)」、「少し当てはまる (3 点)」、「よく当てはまる (4 点)」の 4 段階で評定を求めた。

子どもの学校適応に関する項目 浜名・松本 (1993) の学校適応尺度に若干の修正をして使用した。具体的には、項目にある「組」という表現を中学生でも違和感がないよう「クラス」という表現に修正して使用した。「学校への関心」(項目例:「学校が休みだといいのにと思う (逆転項目)」)、「毎週月曜日、学校に行きたくないあと思う (逆転項目)」)、「学習への意欲」(項目例:「授業中、先生に当てられたくないと思う (逆転項目)」)、「勉強には難しいことが多くて、面白くないと思う (逆転項目)」)、「教師との関係」(項目例:「先生のそばにいと、なんだかあたたかいように思う」、「困った時や心配な時、先生に相談したいと思う」)、「級友との関係」(項目例:「クラスの友だちは、あなたの気持ちをよくわかってくれると思う」、「困っていると、クラスのみんなは、あなたを助けて

くれると思う”)という4つの側面から子どもの学校適応を測定する尺度である。教示および回答形式は上述の子どものユーモアに関する項目と同様であった。本研究における α 係数は「学校への関心」で.89、「学習への意欲」で.84、「教師との関係」で.73、「級友との関係」で.86であった。「教師との関係」においてはやや低い値であったが、その他の下位尺度においては十分な値であった。

デモグラフィック変数 性別、居住地域、学齢について回答を求めた。なお、調査では、前述の変数以外に、教師のユーモア、クラスの雰囲気、精神的健康、コーピングとしてのユーモアといった変数を測定していたが、本研究では分析に使用しなかった。

結 果

ユーモア尺度の因子分析と信頼性および記述統計量

子どものユーモアに関する12項目に対して、最尤法による探索的因子分析を行った。固有値の推移(6.54、1.35、0.81、0.60、0.49、0.42、0.36...)と解釈可能性から3因子解が適当であると判断した。3因子解を指定し、プロマックス回転による因子分析を行った結果、因子負荷量がどの因子にも.40以下に満たない項目、複数因子に.40以上の項目はみられなかったため、これを最終的な因子パターンとした(表1)。3因子解での因子的妥当性を確認の因子分析によって検討した結果、GFI=.911、AGFI=.864、CFI=.947、RMSEA=.062と満足できる適合度を示した。

表1 児童・生徒のユーモアに関する項目についての探索的因子分析結果

項目	F1	F2	F3
F1: 攻撃的ユーモア ($\alpha=.88$)			
だれかをひやかすことで、クラスの人をわらわせることがある	.86	-.12	.06
だれかをからかって、クラスの人をわらわせることがある	.82	.14	-.09
だれかが言い間ちがえをしたときに、それを指摘してクラスの人をわらわせることがある	.71	.06	.00
だれかをネタにして、クラスの人をわらわせることがある	.70	-.02	.18
F2: 遊戯的ユーモア ($\alpha=.85$)			
おもしろい話し方をして、クラスの人をわらわせることがある	-.11	.87	.06
だじゃれを言って、クラスの人をわらわせることがある	.05	.84	-.10
みんなが楽しくなるじょうだんを言って、クラスの人をわらわせることがある	.00	.66	.13
テレビ番組のまねをして、クラスの人をわらわせることがある	.21	.54	.03
F3: 自虐的ユーモア ($\alpha=.87$)			
自分の苦手なことをわらい話にして、クラスの人をわらわせることがある	.10	-.07	.81
自分が前に失敗したことを言って、クラスの人をわらわせることがある	.09	-.02	.72
自分のためなところをわらい話にして、クラスの人をわらわせることがある	-.10	.22	.65
自分をわらいのネタにして、クラスの人をわらわせることがある	.11	.19	.59
因子間相関			
	F1	–	.56
	F2	–	.70

第1因子は“だれかをひやかすことで、クラスの人をわらわせることがある”や“だれかをからかって、クラスの人をわらわせることがある”など、他者を攻撃するようなユーモアであると解釈され「攻撃的ユーモア」と命名した。第2因子は“おもしろい話し方をして、クラスの人をわらわせることがある”や“だじゃれを言って、クラスの人をわらわせることがある”など、攻撃性を含まずに遊び楽しむようなユーモアであると解釈され「遊戯的ユーモア」と命名した。第3因子は“自分の苦手なことをわらい話にして、クラスの人をわらわせることがある”や“自分が前に失敗したことを言って、クラスの人をわらわせることがある”など、自分のことをネタにするようなユーモアであると解釈され「自虐的ユーモア」と命名した。

各因子に含まれる項目の α 係数は、攻撃的ユーモアで.88、遊戯的ユーモアで.85、自虐的ユーモアで.87と十分な値が得られた。そこで各因子に含まれる項目得点を加算し、項目数で除した値を下位尺度の得点とした。本研究で分析に使用する全変数の性、校種別の平均値と標準偏差を表2に、相関マトリックスを表3～4に示した。

ユーモアが学校適応に及ぼす影響

校種と性別の組み合わせによって4つの群を構成し、3種類のユーモアを独立変数、学校適応の4側面を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を群別に行った。男子の結果を表5に、女子の結果を表6に整理して示した。

まず、男子では、小学生において、攻撃的ユーモアは、「教師との関係」に対して有意な負の影響を及ぼしていた。また、自虐的ユーモアは「級友との関係」に対して有意な正の影響を及ぼしていた。中学生においては、3種類のユーモアのいずれも、学校適応の4側面に有意な影響を及ぼしていなかった。決定係数は、小学生における「教師との関係」と「級友との関係」のみにおいて有意であった。

次に、女子では、小学生において、攻撃的ユーモアは、学校適応の4側面全てに対して有意な負の影響を及ぼしていた。また、自虐的ユーモアは、「教師との関係」と「級友との関係」に、遊戯的ユーモアは、「級友との関係」のみに対して有意な正の影響を及ぼしていた。中学生においては、攻撃的ユーモアは「教師との関係」と「級友との関係」に対して有意な負の影響を及ぼしていた。また、自虐的ユーモアは「級友との関係」と「学習意欲」に対して有意な正の影響を及ぼしていた。決定係数は、中学生における「教師との関係」と「学校への関心」を除いて、全てにおいて有意であった。

表2 分析で使した全変数の平均値と標準偏差

	男子		女子	
	小学生	中学生	小学生	中学生
攻撃的ユーモア	1.85 (0.68)	2.04 (0.66)	1.72 (0.60)	1.83 (0.62)
自虐的ユーモア	2.52 (0.78)	2.32 (0.66)	2.21 (0.69)	2.26 (0.69)
遊戯的ユーモア	2.01 (0.73)	2.13 (0.63)	1.99 (0.68)	2.27 (0.70)
教師との関係	2.68 (0.67)	2.79 (0.61)	2.33 (0.62)	2.33 (0.59)
級友との関係	2.84 (0.58)	2.90 (0.52)	2.68 (0.53)	2.74 (0.59)
学習への意欲	2.65 (0.59)	2.61 (0.51)	2.40 (0.57)	2.48 (0.58)
学校への関心	2.59 (0.88)	2.69 (0.72)	2.53 (0.71)	2.70 (0.84)

表3 小学生・中学生男子における分析で使した全変数の相関マトリックス

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.
1. 攻撃的ユーモア	—	.57 **	.75 **	-.07	.10	.10	-.04
2. 自虐的ユーモア	.55 **	—	.76 **	.16 †	.34 **	.15 †	.07
3. 遊戯的ユーモア	.68 **	.69 **	—	.09	.18 *	.15	.04
4. 教師との関係	-.06	.00	-.09	—	.48 **	.31 **	.09
5. 級友との関係	.05	.20 *	.16 †	.38 **	—	.45 **	.11
6. 学習への意欲	-.10	-.06	-.15 †	-.04	-.02	—	.45 **
7. 学校への関心	-.08	.00	-.03	.04	.17 †	.35 **	—

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

注) 表の右上が小学生、左下が中学生の値である。

表4 小学生・中学生女子における分析で使した全変数の相関マトリックス

	1.	2.	3.	4.	5.	6.	7.
1. 攻撃的ユーモア	—	.60 **	.74 **	-.09	-.03	-.18 *	-.23 **
2. 自虐的ユーモア	.54 **	—	.76 **	.26 **	.36 **	.06	-.03
3. 遊戯的ユーモア	.63 **	.64 **	—	.16 †	.26 **	-.03	-.08
4. 教師との関係	-.19 *	.01	-.08	—	.68 **	.40 **	.22 *
5. 級友との関係	.01	.43 **	.15 †	.33 **	—	.42 **	.24 **
6. 学習への意欲	.01	.22 *	.03	.12	.33 **	—	.49 **
7. 学校への関心	-.04	.08	.00	.10	.20 *	.52 **	—

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

注) 表の右上が小学生、左下が中学生の値である。

考 察

本研究では、児童・生徒のユーモアが学校適応に及ぼす影響について、学校種（小学校、中学校）と性別の組み合わせごとに検討を行った。児童・生徒のユーモアに関する項目に対して因子分析を

行った結果、ユーモアは、攻撃的ユーモア、遊戯的ユーモア、及び、自虐的ユーモアの3種類に分類されることが示された。これら3種類のユーモアは大学生を対象とした調査（塚脇他，2009a）によっても示されており、児童期や青年期においても同様にみられる頑健な構造であることが示された。

児童・生徒のユーモアが学校適応の各側面に及ぼす影響

学校適応の4側面ごとにユーモアの影響をみると、「教師との関係」に対しては、小学生男子と小学生・中学生女子における攻撃的ユーモアが負の影響を、小学生女子における自虐的ユーモアが正の影響を及ぼしていた。先行研究（Damico & Purkey, 1978）から、児童・生徒のユーモアは教師との関係における適応を阻害することが示唆されていたが、このような影響を及ぼす可能性があるのは攻撃的ユーモアのみであり、小学生女子における自虐的ユーモアは、むしろ促進する可能性が示唆された。

表5 小学生・中学生男子におけるユーモアが学校適応に及ぼす影響

		教師との関係	級友との関係	学習への意欲	学校への関心
小学生	攻撃	-.305 *	-.080	-.022	-.160
	自虐	.207	.491 **	.089	.088
	遊戯	.159	-.134	.093	.095
	R^2	.067 *	.137 **	.025	.016
	F値	2.91	6.39	1.02	0.67
中学生	攻撃	-.012	-.141	-.001	-.121
	自虐	.119	.194	.090	.056
	遊戯	-.162	.120	-.215	.009
	R^2	.015	.051 †	.028	.010
	F値	0.62	2.18	1.17	0.39

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

表6 小学生・中学生女子におけるユーモアが学校適応に及ぼす影響

		教師との関係	級友との関係	学習への意欲	学校への関心
小学生	攻撃	-.501 **	-.522 **	-.353 **	-.383 **
	自虐	.381 **	.431 **	.244 †	.123
	遊戯	.241	.319 *	.041	.110
	R^2	.184 **	.251 **	.076 *	.076 **
	F値	9.12	13.52	3.31	3.30
中学生	攻撃	-.264 *	-.295 **	-.097	-.104
	自虐	.165	.642 **	.363 *	.161
	遊戯	-.020	-.073	-.147	-.041
	R^2	.052 †	.265 **	.074 *	.017
	F値	2.22	14.57	3.23	0.70

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$

次に、「級友との関係」に対しては、小学生男子・女子における自虐的ユーモアと、小学生女子における遊戯的ユーモアが正の影響を、小学校・中学生女子における攻撃的ユーモアが負の影響を及ぼしていた。ユーモアが級友との関係に対して影響するという点については、先行研究 (Fabrizi & Pollio, 1987) と一致するものであった。ただし、これらの研究は、ユーモアが級友との関係における適応を促進するという影響のみを報告していたが、ユーモアを分類して検討を行った本研究においては、攻撃的ユーモアは反対に友人関係における適応を阻害する方向で影響する可能性が示唆された。

「学習への意欲」と「学校への関心」に対しては、ユーモアの影響はほとんど認められなかったが、「学習への意欲」に対して、小学生女子における攻撃的ユーモアが負の影響を、中学校女子における自虐的ユーモアが正の影響を及ぼしていた。また、「学校への関心」に対しては、小学生女子における攻撃的ユーモアが負の影響を及ぼしていた。高校生を対象とした Saroglou & Scariot (2002) の研究では、攻撃的ユーモアと自虐的ユーモアが学習への動機づけと負の関連を示しており、本研究における攻撃的ユーモアの結果はこれと一致しているものの、自虐的ユーモアについては反するものであった。ただし、Saroglou & Scariot (2002) が調査で使用した自虐的ユーモアの測定項目は、内容が過度な自虐に偏っているという点が塚脇他 (2009a) によって指摘されていることから、自虐の程度によって学校適応への影響は異なるのかもしれない。この点については今後のさらなる検討を要する。

児童・生徒のユーモアが学校適応に及ぼす影響に関する校種差と性差

本研究の結果を全体的にみると、ユーモアが学校適応に及ぼす影響は校種と性別によって異なる様相を示している。有意となった決定係数や β 係数をみると、中学生よりも小学生において、男子よりも女子においてユーモアが学校適応に及ぼす影響は強いことが示唆される。

McGhee (1979) は、初期の子どものユーモアは、私的経験として自身が楽しむだけのものであるが、社会生活の中で、自身の感情を隠したり、他者との隔たりを埋めたり、他者をリラックスさせたりするためといった多様な動機による使用を学習していくと述べている。大学生を対象とした調査 (塚脇・越・樋口・深田, 2009b) によって、ユーモアを使用する動機には、「関係構築」、「不満伝達」、「他者支援」、「印象操作」、「自己支援」という 5 つが存在することが明らかにされているが、小学生から中学生へと発達するに伴って、ユーモアを使用する動機が多様化するのかもしれない。特定のユーモアであっても、その使用動機によっては心理社会的健康とポジティブにもネガティブにも関連することが示されていることから (塚脇・平川, 2012)、中学生になり、使用する動機が多様化したことによって、学校適応との関連性が低まった可能性が考えられる。例えば、冷やかしからかいなどの攻撃的ユーモアの使用は、他者への苛立ちや不満などを発散することが主な動機であるが (塚脇他, 2009b)、小学生から中学生へと発達するに従って、他者との関係構築を動機として使用するようになる可能性がある。攻撃的ユーモアと心理社会的健康との関係については、不満発散を動機とする場合はネガティブに関連し、関係構築を動機とする場合はポジティブに関連することが示されていることから (塚脇・平川, 2012)、このように動機が多様化したことによって中学

生において学校適応との関連性が低まった可能性が考えられる。

女性は男性よりもユーモアが学校適応に及ぼす影響が強いという性差については、性役割の観点から考察することができる可能性がある。一般にユーモアは支配性や攻撃性と結びつくものであり、女性よりも男性にふさわしい特性であると考えられてきた (McGhee, 1979)。しかし、近年の研究では、明るい、愛嬌のある、といった特性は、女性的役割として認識されることを示しており (後藤・廣岡, 2003)、支配や攻撃に関わる攻撃的ユーモアは女性に期待されないユーモアであるが、他者を傷つけずに周りを明るくするような自虐的ユーモアや遊戯的ユーモアは、女性に期待されるユーモアであると考えることができる。一方で、男性については伝統的な性役割が揺らいでおり、ユーモアに対する性役割は明確に定まらなくなっているのかもしれない。性役割に一致する行動は学校適応を促進し、一致しない行動は学校適応を阻害していると考えれば、本研究の結果は一応の解釈が可能である。

本研究の課題と展望

本研究では、児童・生徒のユーモアと学校適応との関連を検討し、小学生から中学生へと発達段階が上がるにつれて、ユーモアと学校適応との関連性は弱くなる可能性を示唆した。今後の研究では、小学生、中学生だけではなく、高校生、大学生といった幅広い対象者を調査することによってユーモアが学校適応に及ぼす影響の発達のな変化を明らかにしていく必要があると考えられる。本研究では、小学生から中学生にかけてユーモアと学校適応との関連性が弱まる理由について、ユーモアを使用する動機の複雑化の観点から考察を行なった。今後の研究ではユーモアを使用する動機を測定する尺度 (塚脇他, 2009b) などを使用して、本研究における考察のエビデンスを得る必要がある。

また、性別によってユーモアと学校適応との関連が異なるという点に関しても、引き続き検討を行っていく必要がある。本研究ではこのような性差を導く要因として、性役割の観点から考察を行った。今後の研究では、自虐的ユーモアや遊戯的ユーモアといった他者への攻撃性を含まないユーモアが、小学生・中学生において、女性的役割として認識されているのかを実証的に示すことによって、本研究における考察を裏付けることができる。

本研究では、学校適応とユーモアとの関連をパイロット的に示すため、学校適応の4側面を並列に扱い、ユーモアの影響を検討した。しかし、これらの4側面には影響関係が存在する可能性が考えられる。例えば、児童・生徒のユーモアが学校適応の対人関係の側面 (教師や友人との関係) に影響し、学校における教師や友人との関係が良好になることで、学校適応の学業の側面 (学業成績や学習への意欲) が促進されるといったことも考えられる。今後の研究では、学校適応の4側面に影響関係を仮定し、ユーモアが学校適応に及ぼす影響プロセスに関する詳細なモデルを構築していく必要が求められるだろう。

引用文献

- Damico, S. B., & Purkey, W. W. (1978). Class clowns: A study of middle school students. *American Educational Research Journal*, **15**, 391-398.
- Fabrizi, M. S., & Pollio, H. R. (1987). A naturalistic study of humorous activity in a third, seventh, and eleventh grade classroom. *Merrill-Palmer Quarterly*, **33**, 107-128.
- 後藤 淳子・廣岡 秀一 (2003). 大学生における性役割特性語認知と性役割態度の変化 三重大学教育学部研究紀要, **54**, 145-158.
- 浜名 外喜男・松本 昌弘 (1993). 学級における教師行動の変化が児童の学級適応に与える影響 実験社会心理学研究, **33**, 101-110.
- 小泉 令三 (1995). 小学校高学年から中学校における学校適応感の横断的検討 福岡教育大学紀要, **44**, 295-303.
- Martin, R. A. (2007). *The psychology of humor: An integrative approach*. New York: Elsevier Academic press.
- Martin, R. A., Puhlik-Doris, P., Larsen, G., Gray, J., & Weir, K. (2003). Individual differences in uses of humor and their relation to psychological well-being: Development of the humor styles questionnaire. *Journal of Research in Personality*, **37**, 48-75.
- McGhee, P. E. (1979). *Humor: Its origin and development*. New York: Tuttle-Mori Agency.
- 中谷 素之・遠山 孝司・出口 拓彦 (2002). 社会的責任目標と理科学習への興味・関心と動機づけ、認知的共感性、および学級適応との関連——学年差に注目した検討—— 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要, **49**, 277-287.
- 大対 香奈子・大竹 恵子・松見 淳子 (2007). 学校適応アセスメントのための三水準モデル構築の試み 教育心理学研究, **55**, 135-151.
- Perry, K. E., & Weinstein, R. S. (1998). The social context of early schooling and children's school adjustment. *Educational Psychology*, **33**, 177-194.
- Sherman, L. W. (1998). Humor and social distance in elementary school children. *Humor: International Journal of Humor Research*, **1**, 389-404.
- Saroglou, V., & Scariot, C. (2002). Humor Styles Questionnaire: Personality and educational correlates in Belgian high school and college students. *European Journal of Personality*, **16**, 43-54.
- 塚脇 涼太 (2006). ユーモアの出表と精神的健康との関連 上越教育大学学校教育研究科修士論文 (未公刊)
- 塚脇 涼太・深田 博己・樋口 匡貴 (2011). ユーモア出表が出表者自身の不安および抑うつに及ぼす影響過程 実験社会心理学研究, **51**, 43-51.
- 塚脇 涼太・樋口 匡貴・深田 博己 (2009a). ユーモア出表と自己受容、攻撃性、愛他性との関係 心理学研究, **80**, 339-344.
- 塚脇 涼太・平川 真 (2012). ユーモア出表及びその動機と心理社会的健康 パーソナリティ研究, **21**,

53-62.

塚脇 涼太・越 良子・樋口 匡貴・深田 博己 (2009b). なぜ人はユーモアを感じさせる言動をとるのか？——ユーモア表出動機の検討—— 心理学研究, **80**, 397-404.

Effects of children's humor on school adaptation

Ryota TSUKAWAKI (Hijiyama University)

The purpose of this study was to examine the influence of three types of humor (aggressive humor, self-defeating humor, and playful humor) on students' school adjustment, considering school type (elementary, middle) and gender. Survey subjects were 250 students (125 boys, 125 girls) in elementary school (fourth through sixth grades) and 250 students (125 boys, 125 girls) in middle school (seventh through ninth grades). Comprehensive analysis results suggested that aggressive humor possibly inhibits school adjustment, while self-defeating humor and playful humor encourage school adjustment. These relationships, however, differ based on school type and participant's gender; these relationships were shown to be stronger among elementary school students than middle school students, and stronger among girls than boys.

Key words: humor, types of humor, school adaption.